

## 自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 自己点検・評価委員会、教学マネジメント検討会議

(責任者名) 安村 清美

(役職名) 副学長、教学マネジメント検討会議議長

② 自己点検・評価体制における意見等

| 自己点検・評価の視点                       | 自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等   |
|----------------------------------|--|
| 学内からの視点                          |  |
| プログラムの履修・修得状況                    | <p>本学では、令和7年度入学生よりカリキュラム改編を行い、それに併せて本教育プログラムを導入した。</p> <p>前期開講科目「情報リテラシー(基礎)」の修得率は、人間福祉学部87%、子ども教育学部96%、人間科学部71%であり、全学では86%となった。</p> <p>後期開講科目「情報リテラシー(応用)」の修得率は、人間福祉学部80%、子ども教育学部68%、人間科学部67%であり、全学では74%となった。</p> <p>未修得者については次年度に再履修とするが、すべての学生が確実に修得できるよう、オフィスアワー等を活用し学修支援を強化していく。</p>                                |
| 学修成果                             | <p>履修者は現代社会において不可欠な素養である「データリテラシー」及び「AI活用能力」を体系的に修得することができた。</p> <p>具体的には、統計学やプログラミングの基礎知識を基盤として、Excelを活用した実践的なデータ分析スキルを身に付けることができた。</p> <p>加えて、単なるツール操作にとどまらず、度数分布表や散布図等を用いたデータの可視化を通じて、客観的根拠に基づき意思決定を行う「データ駆動型」の思考プロセスを学修することができた。</p> <p>一方で、数式や記号に苦手意識を持つ学生も見受けられることから、今後は基礎事項に関するより丁寧な説明や個別支援の充実を図り、理解促進に努めていく。</p> |
| 学生アンケート等を通じた学生の<br>内容の理解度        | <p>多様な学科の学生が受講し、AIの社会的影響や倫理、リスクに対する理解の深化が見られた。全体としてリテラシーの向上が確認されるとともに、本プログラムが将来のキャリア形成に有益であるとの肯定的な認識が示されている。加えて、継続的な学習に対する意欲の向上も認められた。</p>   |
| 学生アンケート等を通じた後輩等<br>他の学生への推奨度     | <p>受講学生のうち、91%（「当てはまる」62%、「やや当てはまる」29%）が、本プログラムをこれからの社会を生きるうえで必須の教養であると認識している。</p> <p>また、86%（「当てはまる」49%、「やや当てはまる」36%）の学生が、他の学生や友人にも推奨できる内容であると回答しており、本プログラムに対する満足度の高さがうかがえ、継続的な履修意欲につながっている。</p>   |
| 全学的な履修者数、履修率向上<br>に向けた計画の達成・進捗状況 | <p>本プログラムについては、今後の社会において必要とされる数理・データサイエンス・AIの基礎を全学生に修得させる方針を、教学マネジメント検討会議において確認した。これを踏まえ、令和7年度以降の入学生については本プログラムの履修を必須とし、1年次終了時点での修了を想定している。</p> <p>また、未修得者については次年度に再履修とし、全員が確実に修得できるよう、学修支援体制の整備を進めていく。</p>  |

| 自己点検・評価の視点   | 自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等  |
|--|---|
| 学外からの視点  |   |
| 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価  | 本プログラムは令和7年度より開設しているため、受講学生の卒業は令和10年度以降となる。これを踏まえ、令和11年度以降は、卒業生を対象としたアンケート等を実施し、企業等における評価や活躍状況の把握をキャリア支援部門と連携し努める予定である。   |
| 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見  | 今後は、関係する企業関係者等へのヒアリングを実施し、その結果を教学マネジメント検討会議において共有するとともに、地域連携体制の強化やカリキュラム改善に活用していく。  |
| 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること  | 履修者に対しては、新たな取組として、「AIを相棒にする」ことをテーマとした創造的な演習を実施する。<br><br>具体的には、数式やプログラミングコードを学ぶ前段階として、最新の生成AIを活用した課題解決型学習に取り組むとともに、画像生成AIや対話型AIを用いて、自らの発想やアイデアを具体化するプロセスを体験させる。<br><br>そのうえで、AIの出力結果の背景にある仕組み(確率・統計・データ解析等)について段階的に学び、理論と実践を往還しながら理解の深化を図る。 |
| 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること<br><br>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載 | 数式や分析手法の解説直後に、SNSのトレンド予測や身近な気象データを活用した具体例を即時に提示し、学習内容と実社会との関連性を実感できる授業を展開する。<br><br>また、AIを活用して予習用の短時間動画や数理概念を視覚的に理解できる図解資料を事前に共有し、授業時間内はExcel操作やグループディスカッション等のアウトプット活動に重点を置く反転学習を導入する。<br><br>これにより、基礎理解の定着を図るとともに、学習への主体性や知的好奇心の向上を促進する。   |